

日本ヘーゲル研究史編纂の歩み

YAMAGUCHI, Seiichi / 山口, 誠一

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2013-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008787>

日本ヘーゲル研究史編纂の歩み

山 口 誠 一

I 網羅的ヘーゲル日本語文献目録編纂分野

(A) 文化史としての〈日本のヘーゲル受容〉

日本のヘーゲル研究史については、欧米でも日本でも、まだ系統的に研究されていません。わたしは、そのような系統的研究の端緒として、網羅的ヘーゲル日本語文献目録を公表してきました。この公表が可能となったのは、これまでに、日本で網羅的ヘーゲル文献目録を個別哲学研究分野ではもつとも早くからデータベース構築を伴いながら編纂してきたからです。

これまでに、つぎの網羅的文献目録が公表されています。^a上妻精編「ヘーゲル文献目録——一九六九年まで」(一九七〇)、^b山口誠一・星敏雄編「ヘーゲル日本語文献

目録(一九七〇～一九八七)」(一九八九)、^c山口誠一・星敏雄編「ヘーゲル日本語文献増補目録 付：正誤表(一九八七～一九八九)」(一九九〇)、^d山口誠一編「ヘーゲル日本語文献目録(一九八九～一九九二)」(一九九三)、^e山口誠一編「ヘーゲル日本語文献目録(一九九三～二〇〇三)」(二〇〇四)、(二〇〇五)、^f日本ヘーゲル学会編集委員会編(山田有希子)「ヘーゲル日本語文献目録(二〇〇四)」(二〇〇五)、^g日本ヘーゲル学会文献資料委員会編(三重野清顕)「ヘーゲル日本語文献目録(二〇〇六～二〇〇七)」(二〇〇八)、^h日本ヘーゲル学会文献資料委員会編(竹島尚仁)「ヘーゲル日本語文献目録(二〇〇八～二〇〇九)」(二〇一〇)、ⁱ日本ヘーゲル学会文献資料委員会(裕智樹)「ヘーゲル日本語文献目録(二〇一〇～二〇一一)」(二〇一二)。

このようにして、今日に至るまで目録編纂が、日本のヘーゲル研究者たちによって絶えることなく続けられ、わたしは、二〇〇九年に、日本ヘーゲル学会に文献資料委員会を設置し、ヘーゲル日本語文献目録の組織的編集体制を確立しました。また、二〇〇〇年には、「ヘーゲル日本語文献目録」が、そして、二〇一一年には「ヘーゲル日本語文献目録国際版（二〇〇五～二〇〇七）」がインターネット上で公開されるようになっていきます。わたしも、K・シュタインハウアー編『ヘーゲル文献目録・第二部』（一九九八）の編集にも協力し、多くの研究者たちとともにヘーゲル日本語文献のローマ字化および独訳を行いました。そして、多くのドイツ人研究者たちならびに日本人研究者たちと協力しながら、「ヘーゲル日本語文献目録国際版（一八七八～二〇〇一）」を刊行する段階に最近到達しました^①。

以下のようにして長年にわたる文献目録編纂の結果、ヘーゲル日本語文献目録の端緒は、フェノロサの東京大学講義「哲学史」の聴講者筆記録にあると目下推察しています。この点については、以下の諸分野でも言及いたします。

（B）「ヘーゲル日本語文献目録国際版（一八七八～二〇〇一）」の概要

この文献目録は、一八七八年から二〇〇一年までに日本で公表されたヘーゲル関連文献約五〇〇〇件をできるだけ網羅的に収録しています。ヘーゲル文献の内訳はつぎのとおりです。ヘーゲル文献目録、ヘーゲル自身の著作邦訳、研究書、紀要・雑誌掲載論文、研究文献邦訳、書評、研究動向、研究資料、百科事典関連項目です。

この文献目録を作成する上で、基本資料となったのは、山口誠一編「ヘーゲル日本語文献目録データベース（一八七八～二〇一〇）」です。むろん、このデータベースは、日本語表記ですから、さらにドイツ語表記とローマ字表記に翻訳し、編集しなおす必要がありました。その結果、わたしと大河内泰樹氏（一橋大学準教授）によって、国際版データベース＜GLO＞を一昨年完成させることができました。

たしかに、シュタインハウアーの国際ヘーゲル文献目録第一巻が一九八〇年に発行された後、第二巻が一九九八年に刊行されました。しかし、シュタインハウアーの国際ヘーゲル文献目録では、日本語表記のヘーゲル文献を網羅的に収録することは、残念ながらできていませんでした。

また、そこから日本語文献だけを抽出することも困難であるし、一九九一年以降のヘーゲル文献はいまだに収録されていません。

Ⅱ 日本におけるヘーゲル研究動向解明分野

わが国のヘーゲル研究史全体を概観する場合、六つの時期に大別することができます。

第一の時期は、フェノロサが哲学史講義を開始した一八七八年から一九〇四年までであり、第二の時期は、紀平正美・小田切良太郎訳「エンチクロペディー」が公表された一九〇五年から一九三〇年までです。そして、第三期は、ヘーゲル一〇〇年忌の一九三一年から敗戦の一九四五年までであり、第四期は、一九四六年から一九六九年までです。第五期は、ヘーゲル生誕二〇〇年の一九七〇年から、一九八五年までです。最後の第六期は、ヘーゲル研究会が法政大学で設立された一九八六年から、日本ヘーゲル学会設立を経て現在までです。

そして、いまやこれまでの日本ヘーゲル研究史を踏まえながら、日本のヘーゲル研究者がドイツで日本のヘーゲル研究の紹介を行う段階にきています²⁾。

以上の研究史を援用しながら探索してみると、今日の

ヘーゲル研究の諸動向の興行が多少とも透けて見えてきます。

なるほど、第五期に文献学的・発展史的研究が興隆したことは、日本のヘーゲル研究にも新局面を生みました。しかし、今日までの日本のヘーゲル研究の大枠は、第一期におけるフェノロサによるヘーゲル移植と第二期におけるマルクスのヘーゲル論の流入と第三期における新ヘーゲル主義的ヘーゲル論の流入によって依然として決定されています。つまり、第一に、ヘーゲルの弁証法を、マルクスの唯物論的弁証法の先行形態として見る立場が、依然として存在します。第二に、それと対立するように、カントから始まるドイツ観念論の枠内でヘーゲルを理解しようとする傾向は、今日までかなり根強く存在するのです。

この両者の流れは、たしかに、一見対立し合っているようにも見えるが、根本のところでは一致しています。それは、ヘーゲルを近世の限られた枠内でしか理解していないことです。したがって、古代ギリシアから中世、ルネサンス、ドイツ新人文主義と流れてきた人文古典主義の枠内でも理解しようとするのがわずかなさされていません。

たしかに、日本にフェノロサがヘーゲル哲学を紹介して以来、一三〇数年の年月が流れました。その間に原典翻訳が進み、実に六〇〇〇件以上のヘーゲル文献が公表されて

きています。こうしてヘーゲル理解はその広がりを増してきてはいますし、国際化も進んでいます。しかし、理解の深まりという点では、進展は残念ながらさほど見られないのです。

最後に、ヘーゲル研究の手法についての展望を示しておきます。それは、ヘーゲル・テキストデータベースにもとづく用語分析と、草稿解読の問題です。コンピュータによる用語検索によらなくても、ヘーゲルの主要な用語の用例は、大体見当がつきます。問題は、用語に一見すると見えないけれども、検索すると用語であることが判明するような場合です。しかも、それがヘーゲルの主要な用語と密接に関連している場合には、その主要な用語も含めた未知の文脈を解明するためにも役立ちます。このような地道な研究がまったく進展していないことは、まことに残念なことです。たしかに、ベルリン期の文書については、文献学的問題があるが、『精神現象学』などの著作については、条件は整備されています。また、草稿解読についても、とりわけベルリン期の講義をより正確に理解してゆくためには、もはやそれを避けることができません。

Ⅲ ヘーゲル日本語文献の系統的収集分野

——ヘーゲル日本語文献の

母胎フェノロサ講義「哲学史」——

わが国にヘーゲル哲学が移植された出発点は、東京大学におけるフェノロサの講義「哲学史」（一八七八—一八八五）です。日本のヘーゲル研究は、ドイツから直接移植されたのではなくてアメリカを経由して移植されたのです。そして、強調したいことは、フェノロサ講義の呪縛ともいえるべき影響は、現代日本のヘーゲル研究の根本動向そして高等学校倫理教育における弁証法の図式的紹介に到るまで依然として不可解なほど大きく及んでいることです。

イタリア系アメリカ人アーネスト・フランシスコ・フェノロサは、ハーヴァード大学で、哲学についてはボウエンの講義を受講したり、スペンサー・クラブで活動したり、セントルイス学派の会誌『思弁哲学雑誌』を読んだりしながらヘーゲルを学びました。そして、その関心は、とりわけヘーゲルとスペンサーの統合にありました。フェノロサは、お雇い外国人教師として明治一一年度に東京大学に着任し開講し、明治一八年度まで在任しました。その間に哲学史と理財学と政治学を皮切りに、後には、論理学や哲学

も担当しました。第二年度履修の哲学史だけは、在任中、毎年度担当していました。なお、東京大学文学部は、明治一三年度までは、哲学政治学及理財学科と和漢文学科に分かれていたが、翌年度からは、哲学科、政治学及理財学科、和漢文学科の三科制に改組されました。

各年度の哲学史講義のうちで、現在、筆記録が残っているのは、明治一二年度の市島謙吉と坪内逍遙による筆記録（以下、市島筆記録と坪内筆記録）、明治一四年度の阪谷芳郎による筆記録（以下、阪谷筆記録）、そして、明治一八年度の清澤満之による筆記録（以下、清澤筆記録）です。市島筆記録には、ヘーゲルの部分は見当たらないし、坪内筆記録は、ヘーゲルの部分も含めて、簡略で不正確な記述の域を出ません。それに対して、年度が異なるが、阪谷筆記録は走り書きとはいえ、詳細で正確であったため、最近までフェノロサのヘーゲル論の唯一の基本資料となっていました。しかし、最近、公開された清澤筆記録は、やはり開講年度は異なるが、逐条の筆記へと到達し、格段に詳細にして正確であるため、今後は、阪谷筆記録とともに基本資料となるでしょう。

阪谷と清澤の筆記録を検討すると、フェノロサのヘーゲル論の一貫した特徴は、つぎの三点となります。①いわゆる『エンツュクロペディー』に依拠して、もっぱら論理学

について解釈していて、自然哲学と精神哲学については、目次を紹介する程度にとどまっています。②カント、フィヒテ、シェリングからヘーゲルへの展開を弁証法の図式である正・反・合の成立過程ととらえています。③このような図式化された弁証法へとスペンサーの進化論哲学を包摂して統合することを主張しています。

さらに、阪谷が筆記した明治一四年度講義に見られる特質としては、ロッツェの最新哲学の観点も取り入れようとしていることです。ロッツェの関係理論を援用しながら、絶対者としての体系を、関係性の関係性にとらえています。このようにして、フェノロサのヘーゲル論は、平板な教科書的介绍ではなくて当時のアメリカのヘーゲル研究の水準を伝えているのです。

フェノロサの哲学史講義阪谷筆記録は、二冊あります。一冊には、「政治学／哲学Ⅰ／理財学雑誌」と阪谷の筆跡で書かれています。そして、その表紙左肩に「フェノロサ哲学史（一）」と別記されています。もう一冊には、「哲学2／憲法史」と表紙に書かれ、その裏には「哲学史／英国憲法史／文学部 阪谷芳郎」と墨書されています。そして、その上端に「ヘーゲル哲学史—5.256 Hegel's Phil of History—V.256」というペン書きがあります。なお、阪谷筆記録の英文テキストは、刊行予定の *Jahrbuch für Hegel-*

forschung. Academia Verlag Sankt Augustin. に掲載されます。

さらに、清澤家が非公開で保管していた清澤満之の遺稿類に含まれていた明治一七年度の清澤筆記録が最近公開されました。わたしは、そのカラーコピーを清澤満之記念館の御好意を頂戴し西方寺三八世住職より、東京大学正門近くにある清澤満之縁の地求道会館で受領することができました。そして、清澤筆記録のカラーコピーを調査したところ、筆記年度は異なるが阪谷筆記録よりはるかに詳細なものであることが判明しました。

清澤筆記録が世に知られるようになった経緯は、つぎのようです。まず岩波書店版全集（二〇〇二～二〇〇三）編纂のために公開されるまでの管理は一部の人々が調査する以外は、西方寺三八世住職から現在の三八世住職に至るまで焼失・紛失等がないように百数十年にわたり門外不出にして世に知られることなく保管されてきたとのことでした。最近世に知られるようになったのは、大谷大学編・岩波書店版清澤満之全集編纂にあたって資料撮影記録をした大谷大学清澤満之プロジェクトの地道な努力による結果だということです。満之直筆の中でも東京大学時代の講義ノート等は哲学史講義筆記録も含めていまだ手つかずのものも多いようです。

清澤筆記録のヘーゲルの部分は、「H. P. No. 4 哲学史第六号」と題された筆記録の六六頁から九〇頁までと「H. P. No. 6 哲学史第七号」と題された筆記録の一頁から五七頁までとであります。なお、当該筆記録前半部邦語訳は、日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』（第一七号、二〇一一年一月、こぶし書房）に掲載されています。

以上の阪谷筆記録と清澤筆記録のほかに金井延による明治一六年度哲学史筆記録複写も一九七九年までは米国のイエール大学バイネキー図書館に保管されていたようです。しかし、最近、わたしが同図書館の日本人図書館員に調べてもらいましたが、見つからなくなっていました。膨大な資料のなかに埋もれてしまったか、何者かが持ち去ってしまったかのいずれでしょう。

IV ヘーゲル日本語文献の系統的分析・総合分野 フエノロサ講義「哲学史」清澤筆記録の分析 ——Gedanke（思想）の問題——

ここでは、日本にヘーゲルを移植したフエノロサのヘーゲル理解を、フエノロサの東京大学における講義「哲学史」（明治一七年度）しかも主として受講者の一人清澤満之による前述筆記録にもとづいて紹介いたします。

(A) フェノロサのヘーゲル論の影響

日本のヘーゲル研究への影響という点から申し上げますと、フェノロサは、第一に、ヘーゲル哲学の原理を思想 (Gedanke) とした点で、まことに貴重な功績を遺しています。しかし、この思想の見地は、その後、今日にいたるまで不思議にも忘れさられたままです。それに対して、第二に、ヘーゲルを哲学史の上では近代哲学からだけ理解しようとしている姿勢は、ヘーゲル『論理学』二〇〇年を迎えている今年にいたるまで継承されています。第三に、弁証法を正・反・合の図式で理解する姿勢も、清澤そして田辺元を経由しながら、今日の倫理教育をも強く呪縛しています。

こうして、日本のヘーゲル研究の基本動向は、今日においてもフェノロサのヘーゲル論に呪縛されています。それは、ヘーゲルの哲学が近代哲学と古代哲学の総合の上に成立していることが閑却されたまま、近代哲学からのみ研究されて今日に到っていることを意味しています。もっと具体的にいえば、まず、フェノロサは、ヘーゲル哲学の原理を、デカルト批判を通して思想 (thought) に求めながらも、その思想が古代ギリシア哲学におけるヌースであることを閑却したのです。そして、その後、その閑却を修正す

ることなく、思想を深めることをしないで、思想の展開方法として理解された三段法 (trichotomy) の図式的理解へと流れていったのです。しかも、三段法の先駆形態は、古代ギリシアを無視してフィヒテとシェリングにあるとされているので、三段法は思想の展開方法とはなくなりました。

(B) 筆者清澤満之への影響

フェノロサのヘーゲル論を受容した思想家清澤満之も、ヘーゲルを第一原理としての思想 (thought) とその展開の方法としての三段法という点から理解したが、それはフェノロサをそのまま踏襲しています。三段法については、清澤は、自分なりに消化しようとしたし、その後のヘーゲル研究に継承されたが、思想については、フェノロサ講義の自筆筆記録からの翻訳をして鵜呑みにしたままでした。しかも、その後、ヘーゲルの思想 (Gedanke) の根本的にして独自の内容を説明しようとすることは閑却されました。ちなみに、ヘーゲルの『論理学』の思惟規定は、規定された概念であり、それは、さらに言語論の観点からは、純粹思想と呼ばれています。

(C) フェノロサが遺した積極的遺産としての
思想の重視

フェノロサがヘーゲルを、思想を原理にして解釈しようとしたのは、ハーヴァード大学で習ったボウエンからの影響でしょう。ボウエンは、思想の見地をスコットランド学派の最後の輝きたるW・ハミルトンから得ました。ボウエンによれば、なるほど、すべての知識は、感覚から始まります。その点でカントとロックは軌を一にしています。つまり、外からの刺激などが心を意識として覚醒させるために必要です。しかし、知識固有の始まりは、意識であり、意識の働きは、比較であり、この比較が思想なのです。したがって、意識は、無意識的感覚を要素として精神化学的過程を経て連合によって構成されるわけではありません。ハミルトンも、すべてのものは、他のものとの比較関係によってのみ認識されるとしています。ボウエンは、我思惟するゆえに我存在するということで、思想と思想する者とは不可分であるとしています。このようにして、ボウエンは、デカルト、ヘーゲルそしてハミルトンを思想という概念に集約しました。ここで、思想は、本来ヌースの問題ともなるべきだったのです (C: S.380)。

(D) 「思惟と存在の同一性」としての思想
すなわち事象 (Sache)

まず、刮目すべきは、フェノロサのヘーゲル理解の特徴は、すでにのべたように『論理学』というよりはむしろ『エンツュクロペディー』に徹底的に依拠していることです。そうするとヘーゲル哲学の第一原理は思想だということになります。というのは、ヘーゲルは『エンツュクロペディー』の予備概念で、思惟の次元でその所産としての純粹思想つまり思惟規定から始めているからです。その思想は形式論理の思惟形式から始まるとされ、客観的思想の三つの態度を考察した後、思弁的論理学の始まりへ達することになります。ここでは、思想は、古い形而上学、カントそしてヤコビーも含んでいるのです。思惟が存在との同一性を完全に確保するとヘーゲル論理学の始まりに達するとされます。そして、『エンツュクロペディー』最終部で、ヘーゲルはアリストテレス『形而上学』から思惟と存在との同一性に関連する部分を引用しています。『エンツュクロペディー』予備概念の始まりと『エンツュクロペディー』最終部はこうして照応しています。そして、なるほど『エンツュクロペディー』第四六五節のつぎの文言も、アリストテレス的です。「知性が自覚的に認識するものであると

というのはなぜか？ それは、知性が思惟されてあるものは存在するというを知っており、また存在するものはただそれが思想である限りにおいてのみ存在することを知っているからである」(Enzy: §465)。しかし、つぎの文言は、それをヘーゲルの理解しています。「知性がそれ自身において(本質的に)一般者であるというのとはなぜか？ それは知性の産物すなわち思想が事象(Sache)であり、主観的なものと客観的なものとの単純な同一性だからである」(ibid.)。つまり、「主観的なものと客観的なものとの単純な同一性」としての事象にこそヘーゲルの思弁的思惟の固有性があります。なぜならば、思想としての思惟内容が事象ととらえられるかぎりで客観的思想となり、ヘーゲル哲学の始まりが開かれるからです。「世界には悟性や理性があるというのは、客観的思想というのと意味は同じである。もともと、客観的思想という言葉には具合のわるいところもある。というのは、思想という言葉はあまりにも一般に、精神、意識にのみ属するものとして用いられており、客観という言葉はまず精神的でないものについてだけ用いられているからである」(Enzy: §24, Anm.)。思想とは、精神や意識といった主観にだけ属するという通念を否定するために、あえて客観的思想と表現しています。したがって、思想とは、やはり「客観的なものと主観

的なものとの単純な同一性」なのです。それは、さらに思惟の段階で表明されているわけだから、思惟と存在の同一性なのです。思惟と存在の同一性は、すでにアリストテレスによって表明されてプロティノスにも継承されました。

(E) 思想と表象と事象(Sache)との関係

事象が心理学的にヘーゲル流に解明されているのが、『エンツュクロペディー』『知性』とりわけ「記憶」の箇所なのです。それは、カントの認識能力論から当時の連合心理学への展開をヘーゲルが思惟と存在の同一性の見地からとらえた理論です。「知性の体系化のなかで記憶の地位と意義をとらえ、記憶と思惟との有機的連関を概念的に理解することは、精神論において、いままでもっと注目されなかった点の一つであり、また実際ももっとも困難な点の一つである」(Enzy: §464, Anm.)とされています。記憶では、表象が思想に変化します。

とりわけ記憶は、「表象作用一般としての知性が最初の直接的直観に対して行う想起作用の諸活動と同じ諸活動を、言葉という直観に対して行う」(Enzy: §461)という点で、想起とは区別されています。記憶は、①名前を保持する記憶形態、②再生産的記憶形態そして③機械的記憶形態の三段階を経て思惟に変化します³⁾。

(未完)

《注》

- (1) Taji O Kochi und Seichi Yamaguchi (Hrsg.): Die japanischsprachige Hegel-Rezeption von 1878 bis 2001. Eine Bibliographie. 2013 なほにやまだ。
- (2) 既在¹ Yoichi Kubo, Seichi Yamaguchi und Lothar Knatz (Hrsg.): *Hegel in Japan. Studien zur Philosophie Hegels in Japan*. なかにやまだ。
- (3) つの点に関する詳細は、拙論「フェノロサ講義『哲学史』新資料をめぐって——Gedanke（思想）の問題——」（二〇一一年一〇月、『法政大学文学部紀要』、第六三号、一—一四頁）を参照しつべし。

文献略号

- W: G. W. F. Hegel: *Werke in zwanzig Bänden*. Auf der Grundlage der Werke von 1832–1845 neu editierte Ausgabe. Redaktion: E. Moldenhauer und K. M. Michel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1969–1979.
- Enzy: G. W. F. Hegel: *Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)*. Hrsg. v. F. Nicolin und O. Pöggeler. Verlag von Felix Meiner, Hamburg, 1969.
- G.: G. W. F. Hegel: Nachschriften. Ms. germ. qu. 540, die Geschichte der Philosophie. Kollegnachschrift Berlin. W.-S. 1825/26, von Karl Gustav Julius v. Griesheim, Heft 1.